

〈原著〉

## 特別支援学級における学生ボランティア導入に関する調査研究（2）

今野 邦彦（藤女子大学 人間生活学部 保育学科）

藤女子大学人間生活学部保育学科が石狩市立小中学校の特別支援学級の協力を得て行っている学生ボランティア活動の2年目を総括するとともに、学生の視点から見たボランティア活動の成果と課題について考察した。

成果として最も多く挙げられたのは、特別支援学級の現場での体験であり、具体的には、特別なニーズのある子どもたちだけの学級集団、子ども一人ひとり異なるニーズとそれに応じた教育・支援、少人数のクラス、チームティーチング、通常学級との交流学习などであった。

「児童生徒との関わり」「教員との関わり」については、成果と課題の両面が取り上げられ、「子どもと仲良くなれた」「成長を見ることができた」「教員から必要な支援を学んだ」という成果、「障害のある子どもと、どう接して良いかわからない」「ボランティアの立場でどこまで踏み込んでいいのかわからない」「教員との打ち合わせ・連携不足」という課題が挙げられた。

またボランティア活動の単位化については、学生の意見も多様であるが、活動内容の整備を図ることでボランティア事業の充実発展につながることを示唆された。

**キーワード：**特別支援教育、特別支援学級、学生ボランティア

### 1. はじめに

2007年の特別支援教育の本格実施から10年目を迎えようとしているが、その内容の充実に向けての取り組みはいまだ途上にあるといえることができる。

藤女子大学人間生活学部保育学科では、2013年度の子備的調査研究<sup>1)</sup>を踏まえ、2014年度から石狩市の小中学校特別支援学級において、ボランティア活動を開始した。

今野<sup>2)</sup>はこの初年度の取り組みについて、ボランティア派遣先の特別支援学級の教員に質問紙調査を実施した。その結果、学生ボランティア導入の成果として、教員から見て「普段よりもきめ細かい対応や指導ができた」ことを挙げ、また「特別支援学級においては、ボランティア学生はどの子どもにも平均的に関わり、配置や役割について臨機応変に対応することが求められている」ことを明らかにした。一方、ボランティア導入に関する課題として、打ち合わせ・連携などの体制整備、適切な人員配置などを挙げた。

このボランティア活動は2015年度も引き続き実施

されたが、派遣学生の実人数は減少する結果となった。これは大学の時間割変更の影響が大きいと考えられるが、学生から見たボランティア参加の意義や困難さという側面を調査する必要性も示唆することとなった。

そこで本稿では、2年目を迎えたボランティア活動を総括するとともに、学生の視点から見たボランティア活動の成果と課題について考察することを目的とする。

### 2. 学生ボランティア活動2年目の概要

本事業2年目である2015年度の特別支援学級ボランティア活動の年間実施状況を前年度と比較したのが図1である。

2015年度はボランティア参加学生の実人数が59名から23名へと大幅に減少したが、実施校数も6校から5校へと少なくなった。

人数の減少については、ボランティア参加希望調査において「参加したいが、必修科目があって参加できない」との回答が多かったことから、学生の時間割が

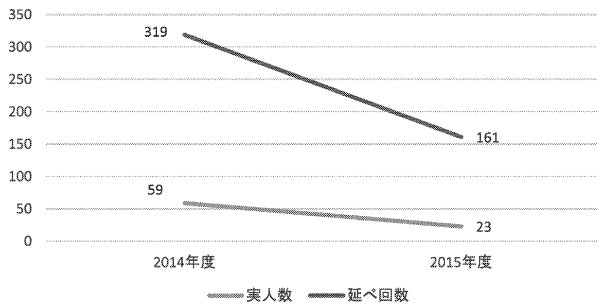


図1 特別支援学級ボランティアの実人数・延べ回数の推移

変更になり、各学年とも必修科目の配置が変わったため、ボランティア参加に必要なまとまった時間がとれなくなったことが大きな要因と考えられる。

実施校数の減少については、参加希望学生の減少により、実施予定校が希望する曜日・時間に合致する学生を配置できなかったことによるものであった。

このように大学の時間割によって、毎年のボランティア参加可能な学生が大幅に増減するのは、事業の運営上好ましいことではなく、現在はまったくの任意で行っている活動を授業として単位化することも視野に入れる必要がある。

学生が毎回提出する報告書に基づいて、活動内容を集計したものが図2である。これについては、過去2年分の活動内容を、文部科学省「特別支援教育関係ボランティア活用事例集」<sup>3)</sup>を参考に分類した(複数回答)。

活動内容については2014年度と2015年度で大きな変化はなく、「教員が授業を進める際の補助」が4割、「休み時間などの遊び相手」が3割を占め、以下「安全確保のための見守り」「生活面での支援」「行事(練習を含む)支援」「車いす、移動などの介護」が続いた。

ただしこの活動内容の集計は全実施校での総和であり、実際には学校ごとに活動内容・活動時間の違いが

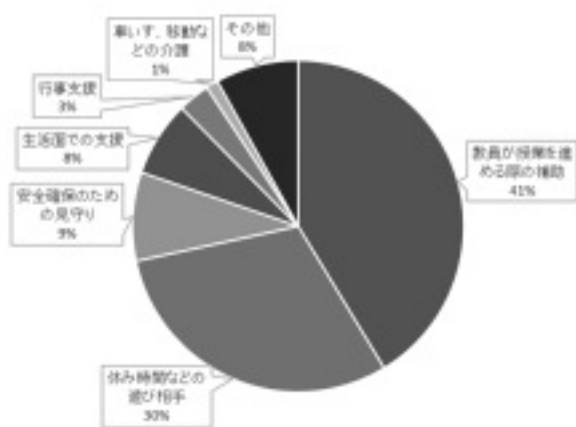


図2 ボランティア活動内容 (2014～2015年度)

あったと考えられる。学生の報告書には「見学・見守りの時間が多く、もっと子どもと関わりを持ちたかった」との感想もあり、活動の内容の充実が課題となっている。

2014年度は本事業の開始年度であり、特別支援学級の現場で学生ボランティアを受け入れていただくことに重点を置いていたが、2年目になり、その活動内容と学生の意識についても検討すべき課題があると考えられる。

### 3. 調査

#### (1) 目的

ボランティアに参加した学生の視点を通して、特別支援学級における学生ボランティア導入の成果と課題を明らかにする。

#### (2) 方法

2015年度の特別支援学級ボランティアに参加した学生を対象に、年度末に質問紙調査を行った。

調査は、「特別支援学級ボランティアに参加してよかったこと」「特別支援学級ボランティアで困ったこと」については自由記述で、また「このボランティア活動で単位が取得できるとしたら、取得したいか」については選択肢と自由記述で回答を求めた。

#### (3) 結果と考察

ボランティア活動に参加した学生23名全員から回答があった。

##### 1) ボランティアの成果

まず、「特別支援学級ボランティアに参加してよかったこと」すなわち学生から見たボランティア活動の成果については計49項目の回答があり、これを内容ごとに分類したところ、表1のとおりであった。また、自由記述の内容を表2に示す。

特別支援学級の教育内容の理解については、まず第一に、初めて特別支援学級の教育に接し、児童生徒の実態とそれに応じた教育内容を知ることができたことに多くの学生が意義を認めていた。また、土日に行わ

表1 学生から見たボランティアの成果

	回答数
特別支援学級の教育内容の理解	14
教員との関わり	13
児童生徒との関わり	9
障害に対する理解	5
大学の授業の理解	5
自己の成長	3

表2 学生から見たボランティアの成果 (自由記述から抜粋)

<p>特別支援学級の教育内容の理解</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・特別支援学級で実際にどのように授業が行われているかを見ることができた。障害がある生徒それぞれの特徴・性格に合わせて、理解しやすく、興味を持てる、生徒が主体となって取り組めるように、授業の内容や進め方が工夫されていて「一人一人のニーズに合わせる」というのは具体的にどんなことなのかを目の当たりにできて、良い経験になった。</li> <li>・今まで参加したボランティアは行事のサポートが多かったが、今回は普通の授業の様子を間近に見ることができたので、子どもの課題に応じた教員の言葉かけや子どもの姿の実際を知ることができた。</li> <li>・普通の授業の様子を見ていることで、自分が実習をする際のイメージが持てるようになった。</li> <li>・1～2回のボランティアでは、子どもとの関わりや先生方とお話させていただくことも難しい部分があるが、長期でやることで、子どもとも仲良くなれたし先生方からも話をたくさん聞くことができた。</li> <li>・少人数のクラスであるため、一人一人のアイデアを採り入れやすく、行事では自分の役割を把握しながら行っている子どもの様子が見られた。普段は中学生と関わる機会も、少人数制の授業に参加する機会もあまりないので、貴重な経験になった。</li> <li>・チームティーチングがしっかりされており、合同授業も多かったように感じた。</li> <li>・去年は小学校のボランティアに行き、今回は中学校のボランティアに行ったので、求められることの違いを知ることができた。また特別支援学級と通常学級の合同の授業を見ることにより、改めてその大切さを学ぶことができた。</li> </ul>
<p>教員との関わり</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・先生方が子どもたちのどこを伸ばしたいのか、どこに重点を置いて教育をしているか、実際に見ることで良かった。</li> <li>・先生はどのように接しているかを見て、これから保育者を目指す私にとっては、なるほどと思わされた。</li> <li>・先生との会話を通して、子どもたち一人一人をしっかり見て考えることができたこと。</li> <li>・先生方が、生徒たちにどのような力をつけてほしいために「このようなことをしている」ということを丁寧に教えていただいたため、必要な支援について学ぶことができた。</li> </ul>
<p>児童生徒との関わり</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一度きりではなく、毎週通うことで、子どもたちとどんどん仲良くなることができた。</li> <li>・少人数制であったので、一人一人の子どもの個性を知り、それに合わせて言葉がけできた。</li> <li>・中学生と関わる機会が今までなかったので、学習の援助や子どもとの関わりにおいて、とても勉強になった。どのように伝えたら子どもたちに伝わりやすいのかなど、考えながら子どもと接することが自分の力になった。</li> <li>・去年も行った学校にボランティアに行ったので、1年経って前よりもすっかり先輩らしくなっていたり、字がきれいになっていたり、子どもの成長を見ることができた。</li> </ul>
<p>障害に対する理解</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・障害のある子どもたちが小学生や中学生になった時に、どのような学習をしているのかを見ることができ、幼稚園や保育園に通っている段階でどのような課題をクリアしておくべきなのか、学ぶことができた。</li> <li>・障害の程度は軽いにしても、言葉遣いや質問に対する答え方、日々の生活態度など、基本的なことでもしっかり身につけられるよう、繰り返し伝えていくことが大切なのだと思う。</li> </ul>
<p>大学の授業の理解</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学の授業で学んだことについて、ボランティアに参加することで、理解が深められた。</li> <li>・授業の中で、先生方が実際に視覚的に子どもたちに訴えているのを見て、大学での勉強とリンクさせることができた。</li> </ul>
<p>自己の成長</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学に入る前は、特別支援について深く考えたことはなかったが、ボランティアに参加して、素敵な出会いがたくさんあり、特別支援について学びたい思いが強くなった。</li> <li>・特別支援学校教諭の資格を取得しようか悩んでいたが、ボランティアに参加してみて、ひたむきに頑張る子どもの姿を見て感動し、資格についても前向きに考えることができた。</li> </ul>

れることが多い一度限りの行事支援ボランティアと異なり、普段の子どもや授業に関わることができるという点に成果を感じる学生も多かった。「普段の授業の様子から、子どもの行動や教師の関わりについて理解を深められた」という回答も多かった。また、少人数制、チームティーチング、合同授業などの指導体制や、小学生・中学生といった対象年齢の違いからの学びについての記述も見られた。

学生から見た成果で次に多かったのは、特別支援学級の教員との関わりに関するものであった。児童生徒

の実態を踏まえた教師の指導・支援を見ることだけでなく、教師から直接話を聞くなどして学べたことが回答から示された。

児童生徒との関わりについては、自分と子どもたちの関係性が深められたことについての回答が見られた。また2年連続して同じ学校に派遣された学生からは、年月を経た子どもの成長を実感できたという成果が語られていた。

障害に対する理解及び大学の授業の理解に関する記述からは、これまで障害に対して持っていた漠然とし

たイメージや、大学での座学から得た知識が、学校現場での指導に触れることにより実際の指導と明確に結びつき、さらに理解を深められたことが窺われた。

さらに、自己の成長については、ボランティアに参加したことを通して、特別支援教育や教員免許資格取得についての意識が高まったことが窺われた。

2) ボランティアの課題

次に「特別支援学級ボランティアで困ったこと」すなわち学生から見たボランティア活動の課題については計 33 項目の回答があった。これを内容ごとに分類したのが表 3 であり、表 4 に自由記述の内容を示した。

児童生徒との関わりに関する課題は、自由記述の内容からさらに二つに分類することができた。第一は予想外の事態への対応であり、第二は関わりの少なさであった。予想外の事態に対する対応は、保育学科の学生であれば幼稚園や保育所の実習経験からある程度は身につけていると考えられるが、障害や年齢という自

分にとって経験の少ない要素をどう考慮して対応してよいのかがわからなかったと思われる。特に発達障害のある児童生徒同士のトラブル対応については上記以外の回答にも記述が見られ、学生にとって大きな課題であったことが伺われた。一方、関わりの少なさは、一部の授業や場面において「見学」「見守り」が主となってしまったことや、ボランティア学生の人員配置に偏りが出てしまい、児童生徒数に対して学生が多くなりすぎ、十分に子どもと関われなかったというものであった。いずれの課題についても、特別支援学級と大学との綿密な打ち合わせ・調整による改善が望めるものであり、さらなる連携が必要である。

交通手段・交通費については 2014 年度からの懸案事項であったが、今回は学生側からの切実な回答が得られた。これまでの実績をもとに予算化を目指す必要があると考えられる。

活動内容については、児童生徒との関わりとも重複する部分があるが、「ボランティアの立場で、何をどこまで指導して良いのか」という戸惑いが見られた。

教員との関わりについては、授業内容や時間割変更についての連絡に関するものであり、大学と特別支援学級の連絡体制の改善により解決できるものであると考えられる。

3) 単位取得の希望

前述の通り 2 年目の学生ボランティア参加者数が大

表 3 学生から見たボランティアの課題

	回答数
児童生徒との関わり	14
交通手段・交通費	8
活動内容	5
教員との関わり	4
その他	2

表 4 学生から見たボランティアの課題（自由記述から抜粋）

児童生徒との関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが転んで泣いてしまったことがあったのだが、その時にどんな言葉をかけて何をしてあげたらいいか、わからなくて困った。</li> <li>・叱り方、叱って良いのかが、わからなかった。</li> <li>・子ども同士がもめて互いにカーッとなってしまった時、どう接したらいいのかわからなかった。</li> <li>・子どもが怒りだした時など、中学生は特に力が強いので、暴れ出したらどうしようと困ってしまった。</li> <li>・見学の時間が多く、あまり子どもたちに声をかけたりする場面がなかった。</li> <li>・子どもと授業中に関わる機会が少なかった。</li> <li>・生徒の人数に対しボランティアの学生の人数が多く、どのように関わってよいか分からなかった。</li> </ul>
交通手段・交通費	<ul style="list-style-type: none"> <li>・交通費の支給がない。</li> <li>・大学の自転車が使えるようになると、ありがたい。</li> <li>・少し通うのに大学から離れていて、雨の日に困った。</li> <li>・冬場は自転車が使えなくなると、ボランティア先へ通うのが難しい。</li> </ul>
活動内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国語、数学などの教科をサポートする際、生徒に伝わるような教え方が出来ずに苦戦した。</li> <li>・漢字を教える、文章の手直しなどの支援をどこまで踏み込んでいいのかという判断が難しかった。</li> <li>・給食の時間まで一緒にいることはできなかったが、子どもたちから「給食も一緒に食べたい」と言われることも多かった。なので、終わりの時間はもう少し長くても良かった。</li> </ul>
教員との関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その日の授業内容を知らずに毎回行っていたので、どのように動いてよいのか分からず戸惑ったことがあった。</li> <li>・授業時間が変更になり、学校に着いたらもう授業が始まっていて途中から入ることになってしまった日があった。授業中に入っていくのは、子どもたちの集中を欠いてしまうことになってしまうこともあるのではないかと思うので、予め連絡をしていただけたらよかったと思った。</li> </ul>

幅に減少したことに鑑み、「このボランティア活動で単位が取得できるとしたら、取得したいか」について質問紙調査で回答を求めた。結果は表5・表6のとおりである。

本ボランティア活動の単位化についての調査結果は上記の通りとなったが、「せっかく有意義な活動をしているのだから、単位として取得したい」という意向と、「自主的に参加するからこそ意味がある」という思いがあり、さらに登録単位数の上限の問題もあって継続的な検討が必要である。大学としては学生の多様なニーズに応じるため、希望者のみが任意で単位取得できるよう、制度化することが望ましいと考える。

#### 4. まとめと今後の課題

特別支援教育の学生ボランティアに関する研究で、小中学校の特別支援学級に特化したものは見当たらないが、通常学級を対象に含めた先行研究はこれまでも多数行われている。

吉岡ら<sup>4)</sup>は、小中学校の普通学級や特別支援学級でボランティアを行った学生にアンケート調査を行い、一番印象に残ったこととして「子どもの成長」「対象児への周囲の反応」「支援者としての自分の成長」「子どもとの関係の深まり」「支援の難しさ(への気づき)」などを挙げ、学生が学校現場の実践を知ることの意義を述べている。

寺田ら<sup>5)</sup>は、通常学級での学生ボランティア活動について、対象学生にアンケート調査を行ってボランティア活動を困難にする要因を分析し、「教師との連携」「学級支援」「個別支援」「自己の専門性」の4点を挙げているが、なかでも「教師との連携」が最も大きな要因として考えられるとしている。

また中上ら<sup>6)</sup>は、小中学校で特別支援ボランティアを行った学生に質問紙調査を実施し、その結果、学生が感じた難しさとして「教員と情報共有する時間がとれない」「校内での動き方への戸惑い」「校内体制のあり方」があり、学生の戸惑いが支援活動に影響を与えていることを指摘している。

本稿における調査は、特別支援学級でのボランティアに参加した学生のみが対象であるため、学生の意識にも前述の研究とは異なる点が見られた。

すなわち特別支援学級という自分にとって未知の場での実践に触れたことによる成果を挙げる学生が多く見られた。特別なニーズのある子どもたちだけの学級集団、子ども一人ひとり異なるニーズとそれに応じた教育・支援、少人数のクラス、チームティーチング、通常学級との交流学习など、幼稚園・保育所での実習では得られなかった現場での体験がいかに貴重なものであったかを述べる記述が多かった。

「児童生徒との関わり」あるいは子どもの変化・成長については、他の研究と同様、ボランティアの成果と課題の両面で取り上げられていた。中でも本調査で特

表5 単位取得の希望

	回答数
単位として取りたい	14
単位としては取りたくない	2
どちらともいえない	7

表6 単位取得についての回答理由(自由記述から抜粋)

単位として取りたい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティアは子どものことを知ることができる良い手段だと思うので、それで単位が取れるのは良いと思う。</li> <li>・子どもとの関わりの中で学ぶことがたくさんあったため、もし授業として設定していただければ取りたい。</li> <li>・せっかく実際に関わっているので、実習のような感じで単位を取りたい。</li> <li>・特別支援学級に通っている子どもと関われる機会はあまりないし、実習でもこの経験が役立つと思うから。</li> </ul>
単位としては取りたくない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティアの内容が日によって差があるので、単位分の経験が必ずできるということが言えないので、単位として取りたいとは言えない。</li> <li>・取りたい授業を取ると単位数が一杯になるから。また、ボランティアはボランティア精神で参加するものであって、単位として参加するものではないと思うから。</li> </ul>
どちらともいえない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・単位になれば良いこともたくさんあると思うが、単位になったら、「やらされている」という感覚になってしまわないか心配。</li> <li>・こういうボランティアは単位のために参加するものではなくて、自主的に参加するからこそ学びとれるものがあるのかなと思うから。</li> <li>・単位のためになると受け身になりがちで、やらされている感を持ってしまって、相手の学校に失礼になることもあるのではないかと思う。</li> <li>・単位にしまうとボランティアとは少し意味合いが変わってしまうかなと思う。</li> </ul>

徴的だったのは、毎週同じ学級に通うことにより「子どもと仲良くなれた」「成長を見ることができた」というメリットであった。これは本学でも募集している特別支援学校でのボランティアが、主に行事当日の支援という単発の関わりであることとの比較から強調されたものと考えられる。

児童生徒との関わりが課題や困難として捉えられた面もあり、これは「障害のある子どもと、どう接して良いかわからない」という理由が第一だが、「ボランティアの立場でどこまで踏み込んでいいのかわからない」という立ち位置に関わる要素も大きいと考えられる。

また本調査では、ボランティア活動の成果として「教員との関わり」を挙げた回答が多かったことも特徴的であった。記述では、教員から直接受けた指導に加え、教員の指導内容・方法の観察や見学から学び取った要素も多く挙げられていた。一方、他の研究と同様に、教員との打ち合わせ・連携不足も語られており、この意思疎通をスムーズにすることは学生ボランティア事業の根本的な課題ということが出来る。

このような小中学校特別支援学級と大学との連絡を密にする選択肢の一つとして考えられるのが、ボランティア活動の単位化である。今回の調査では学生 23 名中 14 名が「単位として取れるなら取りたい」と回答したが、「単位にすると意味合いが変わる」「自主的に参加することに意味がある」という意見も根強い。しかし単位化すると必然的に小中学校と大学間の条件設定

や学生の関わり方についてもやり取りが増えることになり、現在よりも活動内容が整備され充実を図ることも出来るであろう。まずは希望者について、単位取得の道を拓くことが、本事業の充実発展につながると考えられる。

## 文献

- 1) 今野邦彦・橋本伸也・伊井義人：石狩市における特別支援教育学生ボランティアに関する調査研究，藤女子大学 QOL 研究所紀要(9)，pp 85-90，2014.
- 2) 今野邦彦：特別支援学級における学生ボランティア導入に関する調査研究(1)，藤女子大学 QOL 研究所紀要(10)，pp 55-60，2015.
- 3) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課：特別支援教育関係ボランティア活用事例集，2007.
- 4) 吉岡恒生・相馬慎吾・野澤宏之・原恵美子・村松麻美：発達障害児のための学校支援ボランティア事業(3)―3年間で振り返って―，愛知教育大学研究報告(56)，pp 29-37，2010.
- 5) 寺田容子・秋元雅仁：特別支援教育体制における小・中学校と大学生との連携に関する考察，障害児教育実践センター研究紀要(5・6)，pp 13-24，2008.
- 6) 中上英和・桂川泰典・大平将仁・菅野純：中学校および小学校の特別支援教育における「協働」を考える―特別支援活動をする大学生をサポートするために―，日本教育心理学会総会発表論文集(50)，p 708，2008.

## Research about the student volunteer in special needs class (2)

Kunihiko KONNO

(Fuji Women's University, Faculty of Human Life Sciences,  
Department of Early Childhood Care & Education)